

2013年度校友会中国旅行「河南省古都に歴史を訪ねる旅」報告

0. はじめに

今年度の旅行は、現地の気温のこともさりながら、できれば洛陽の牡丹を見たいということもあり、年度内には実施せず、2014年度に入った4月10日から5泊6日で、参加者21名+添乗員で河南省へ行った。

河南省は夏・商(殷)の昔から、女真族の金に至るまで多くの王朝が都を置いた地である。その歴史の跡を駆け足で巡った。計画に際しては2社から見積りをいただいた。1社は北京から殷墟がある安陽まで高速鉄道を利用し安陽に宿泊する案を提示し、宿泊地が3市にまたがっていた。もう1社は幾分高かったが、全部航空機移動で洛陽と鄭州だけに宿泊する案だったので、これに落ち着いた。

1. 羽田から洛陽へ

初日10日は朝8時に羽田に集合し、簡単な結団式を行い、9時25分のNH1255便で北京に飛び立った。現地時間(以下同じ)の12時過ぎ、ほとんど遅れずに首都空港に到着し、第3ターミナルから第2ターミナルへ移動して夕刻の洛陽行きのMU5699便を待った。しかし機材の到着が18時と遅れたので、急遽空港内の紫悦中餐で簡単な定食を摂り、18時半によく洛陽に向けて飛び立った。

洛陽では、河南省の旅行をすべて手配してくれている現地ガイドの徐さんが出迎えてくれ、そのまま華陽廣場国際大飯店へ投宿し、2泊した。

2. 周王城天子駕六博物館、龍門石窟と關林

11日は『礼記』の逸文にある記載を裏付けた6頭立ての馬車が副葬された駕六博物館から見学した。博物館は馬車が見つかった場所(市内の王城公園内地下)にある。徐さんの他に、女性学芸員の呉さんが熱心に説明してくれた。

洛陽は久しぶりの慈雨ということであったが、気温が低く龍門石窟は傘をさして雨合羽を買っての観光となった。雨のためか土日には7万人を超えるという観光客数が、約2万人と少なめであったため、奈良の大仏様のお手本である盧遮那仏像も近くでゆっくりと拝むことができた。

そのあと、頤君大厦(瑞福の間)で昼食を摂り、午後は曹操が關羽の首を葬った場所だという關林を訪れた。雨が降っていたのでその後に予定していた牡丹見物は翌日にすることにし、早めにホテルに帰った。夕食まで2時間ほど自由時間が取れたので、多くの参加者はホテルの向かい側にある商城の地下のスーパーで、書籍やお土産ものを物色した。

夕食は泊まったホテルの中央庁で摂った。牡丹祭の優待として各部屋の飲み物が無料提供された。

3. 白馬寺と牡丹園、漢魏故城遺跡

12日の午前中は洛陽市東郊外の白馬寺に行った。この寺は漢倭奴国王印が下賜されたところに建立された中国で一番古い寺院であり、門の部分だけが当時の建築であるという。郊外に立地しているのは、当時の洛陽城が後でバスから見学した漢魏故城遺跡にあったからである。

牡丹祭には全中国から山のように観光客が訪れる。われわれも、共産党の引退した大物が突然来ることになって、予定していたホテルを追い出された。市内に10箇所以上ある牡丹園はどれも満員で、白馬寺にほど近い牡丹園に入ったが、観光バスが路上に2重3重に駐車していた。雨に打たれた牡丹はしなだれたものも多かったが、白馬寺境内でも鑑賞できた。

一面の畑になっている漢魏故城遺跡の発掘現場をバスで一周りして、連霍高速(G30)を鄭州へ向かった。途中桐がたくさん植わっていて、淡い紫の花を付けていた。江南の桃や広東の木綿花とは異なる趣があった。

4. 河南博物院

午後鄭州に着き、仲記酒樓で遅い昼食を摂り、主に河南省の遺跡から発掘された遺物約14万点を収蔵している河南博物院を5時の定時まで見学した。徐さんの他に元館長の王女史も案内してくれた。

夕食は豫滿樓(110号室)で摂り、鄭州中州假日酒店に3泊した。このホテルはかつては中州賓館と言い、多くの要人が止宿した由緒ある建物であるが、改修工事の予定があるそうで、電子キーの調子が悪い部屋が多かったのが残念であった。

5. 殷墟

13日は鄭州から京港澳高速(G4)を黄河を超えて200km近く北上した安陽にある殷墟へ向かった。安陽でお役人の郭さんと合流し、早い昼食を天天菜根香酒楼(南江憶の間)で摂り、殷墟に向かった。

殷墟は公園になっていて内部に殷墟博物館がある。現在までに発掘されたものの中では中国最大という鼎が置いてあった。楚の荘王が軽重を問うた鼎はこれよりも軽かったのだろうか、疑問になった。埋葬や占卜の犠牲となった首なし骸骨(羌族か?)の模型が、発掘状態で見られた。武丁の後であった女丈夫婦好の墓も公開されていた。

帰路も、取付部分を含めて9kmもある黄河の橋をわたって「白日依山盡」ならぬ河に沈む夕日を眺めながら、黄河が天井川になっている実態を見た。夕食は仲興楼(荷之情の間)で摂った。

6. テーマパークの街、開封(かいほう)

14日に訪れた開封は、五胡十六国時代から金朝までの古都で、鄭州から片道4車線の一般省道鄭開大道で結ばれている。工事中の高速鉄道が開通すると18分で行けるようになるとのこと。鄭開は一つの都市として機能するかもしれない。なお、開封は平遥のような清代の城壁が残っている数少ない都市の一つである。

開封到着後、今に残る数少ない宋代の建造物の開寶寺の鉄塔を見た。鉄塔は周囲を瑠璃瓦で覆ってあるのが鉄錆色に見えるからこの名称がある。その後、京劇やTVドラマで中国人に広く知られている包青天(包丞)を祭った包公祠で、有名な劊(zhá)美案の場面などを見た。包公祠の横にある大きな池は包公湖と呼ばれ、昔の開封府がその下10数mに黄河の洪水で埋まっているそうである。黄河からの地下水の影響があり、まだ発掘に成功していない。

昼食は華梅大酒店(207号室)で摂り、午後からは清代の万寿宮内の龍亭大殿を再現した建物がある龍亭公園の前につながる宋都御街を散策した。宋都御街の公園側には、妓館だった馨楼が再現されていた。

龍亭公園の前に広がる龍亭湖は、昔の皇宮があった場所であると言われている。この池の横に、『清明上河圖』に書かれた賑いの街を再現したテーマパーク清明上河園があり、2時間ほど出し物を見たり、宋代の衣装や文物を見て、当時世界のGDPの半分以上を占めたという宋の都の繁栄ぶりを味わった。

ホテルに戻って最後の夜の宴会となり、参加者各自が自己紹介して旅のメイン行事は終了した。

7. 鄭州から帰国

朝7時半にホテルを立ち、9時40分のCA1332便で北京に向かった。ほとんど遅れもなく、国際線で荷物を預け、空港内で各自昼食を摂った。約2時間待って搭乗前に解散式を行い、15時45分のNH1256便に乗ったが、空港が混んでいて30分ほど離陸待ちになった。幸い追い風が強かったので、飛行時間2時間半ほどで、羽田にはほぼ定時に到着し、流れ解散した。

8. おわりに

PM2.5の影響を減らすため北京市内通過を避け、高速鉄道を利用しなかったため、首都空港内で航空機の乗継ぎに長い待ち時間を参加者に強いてしまったことについては、申し訳なく思っている。北京経由の旅行については今後日程を含めて検討する必要があると感じている。

日本語が達者で河南省の歴史に詳しい洛陽王朝国際旅行社の徐さんおよび添乗員の日中平和観光の手塚さん達の行き届いた準備と対応によって、無事に楽しく旅ができた。料理については、徐さんのご尽力で参加者の口に合う料理と料理法を店側に指示していただき、美味しく平らげることができた。バスの運転手の謝さんは全コースを安全に運転していただいた。さらに、河南博物院では参加者のご友人で、すでに退職なさった元館長の王先生自らが案内をしていただき、博物院の紹介冊子を参加者に配っていただいた。殷墟では安陽市の外事弁公室の郭氏が一行の安全を見極めるため、現地まで同行していただいた。これらの方々に感謝する次第である。

なお、学院報上で掲載しきれない写真や詳しい報告は、校友会のHP上に上げてある。日中学院のHP上からのリンクの他に、直接<http://xiaoyouhui.sakura.ne.jp/lvyou.htm>からでも見ることができる。

次回以降の旅行先についてのアンケートも同じくHP上にあるので、自由に希望を述べて欲しい。

2014年4月21日

校友会旅行委員 猪飼記

